

トヨタ財団
広報誌[ジョイント]
January 2018

No.26 【特集】 文化としての「農」

今、農業が新たな注目を集めています。産業としての再興のみならず、人々の暮らしや営みと一体となった、ひとつの文化としての「農」を見つめ直していこうという試みが各所で行われているのです。新年のスタートにあたり、本誌ではそんな「農」への熱い思いと活動をご紹介します。





公益財団法人トヨタ財団会長
小平信因（こだいら・のぶより）

二〇一八年の新年のご挨拶を申し上げます。

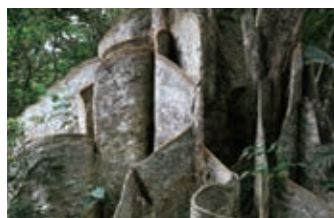
昔から日本人は、新年を、家族や田畑を守ってくれる年神さまが家々を訪れる、ハレの場、ハレの時として考えてきたといえます。そのハレの場、ハレの時を迎えるためには、いろいろな準備が欠かせません。旧年の間にたまった汚れを取り除く煤払いを行い、年神さまの依り代となる門松やしめ縄、魂が宿る鏡餅を用意する。また、元旦の朝、新年最初の太陽を拝み、早朝に若水を汲む。このような儀礼を積みかさねる中で、日々の日常とは違う、清いハレの場、ハレの時である新年を迎えます。そこで、人々の心と身体に新たな力が吹き込まれ、それが新しい年の良き吉事につながるのだと思います。

昨年を振り返りましても、日本社会に新たな力が吹き込まれていることを実感させる出来事がいくつかありました。将棋界においては、弱冠十五歳の藤井聡太四段が破竹の勢いで勝ち進み、歴代最多の二十九連勝という大記録を達成しました。卓球界では、十七歳の平野美宇選手が、長年圧倒的な強さを見せてきた中国勢を立て続けに破り、アジア選手権で女子シングルの金メダルを獲得しています。このような新しい力こそ、日本社会の未来を切り開くものです。

トヨタ財団におきましても、日本に新しい力を吹き込むことを、助成を通じてさらに積極的に促していきたいと考えます。そのためにも、二〇一八年においては、トヨタ財団の助成プログラムそれぞれ自体のイノベーション——このinnovationという英語について、ラテン語の語源に遡りますと、まさに「新しい何もの」かを入れる」という意味となります——に取り組む所存です。

どのような具体的課題に取り組むことが、トヨタ財団らしさを最も発揮できるのか、社会的に意義の大きなプロジェクトへどう重点的に助成金を投入していくことができるか、助成プログラムの作りは十年先、二十年先を見据えたものになっているのか、助成するプロジェクトの波及効果をより大きくするためには何をなすべきなのか、といった問題意識を自問自答しつつ、皆さま方のお考えも伺いながら進めて参ります。

新年にあたり、社会の変化のスピードがかつてなかったほど速くなっている今だからこそ、それに対応し、さらに先回りした助成プログラムのイノベーションを通して社会に貢献して参る決意を新たにいたしますとともに、引き続き皆さま方のあたたかなご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。



西表島の南東部を流れる仲間川。その上流にそびえるサキシマスオウノキは樹齢約400年と推定されています。樹高は18メートルですが、その底部からは3メートルにおよぶ日本最大級の板根が圧倒的な存在感を放っていました。1982年に発見され、国指定の天然記念物となっています。（本誌 P.18参照）

Photo by Kenta Kusuda

CONTENTS

FIRST WORD ● 小平信因

新年のご挨拶 …… 2

特集：文化としての「農」

インタビュー ● ERI 聞き手／馬場末織

世界農業遺産阿蘇の地で「幸せ」を育み広げる …… 5

私たちの取り組み ― 助成対象者からの寄稿

国際助成プログラム ● 箕曲在弘

学びあいから生まれる農家の未来 …… 10

国内助成プログラム ● 若尾健太郎

農福連携による「みんなの畑」の挑戦と実践 …… 12

研究助成プログラム ● 勝俣 誠

「農の営み」を通じた新しい価値軸とは …… 14

山岡義典さんに聞く 市民社会を実現するために何が不可欠か

真の市民社会を市民の手でつくるために …… 16

活動地へおじゃまします！〈沖縄・八重山諸島を訪ねて〉● 楠田健太

「伝統の森」を継承していくために …… 18

「私」のまなざし ⑩ 小川晋史

偶然と人の輪が未来を紡ぐ …… 22

国内助成プログラム ● 加藤 剛

多文化共生について考える …… 24

お茶っこ通信 第七回 ● 加賀 道

日常の触れ合いが地域と人を育む …… 27

トヨタ財団ジャーナル …… 28

● シンポジウム「学びあいが生み出す農家の未来」に登壇

● 2017年度トヨタ NPO カレッジ「カイケツ」講座 他

文化としての「農」

トヨタ財団の3つの助成プログラム(研究・国内・国際)の助成先を見てみると、「農」という共通したキーワードが浮かび上がってきました。この言葉からは、水田や畑、実りの収穫の様子といった、のどかな情景を思い浮かべる方も多いことでしょう。一方で、農業という産業については、国内では少子高齢化や都市化等による後継者不足や耕作放棄地、国外との関係では外国との通商等、課題は山積しています。

特集にあたり、「農」をキーワードにもつトヨタ財団の助成対象者から、プロジェクトについてご寄稿をいただいたところ、そこに鮮明に描き出されていたのは、風景や大きな課題というよりも、地域の人々の「暮らし」や「営み」でした。

農業を指す英語のアグリカルチャー(agriculture)は、前半の「agri」が土や畑を、「culture」は耕すことなどを意味しています。後者は、よく知られるように文化を意味しますが、同時に伝統や教養など、人の手によって育まれるものを示しています。つまり、「農」は土のある「場」と、それに手を加える「人」によって営まれるものと捉えられてきたのでしょうか。

「人」に着目し、集う「場」としての役割を活用しつつ、地域の諸課題に向き合うためのひとつのアプローチとして、「農」をさまざまな側面から捉え直す取り組みは、全国・世界各地にくつもあることでしょう。自分たちの暮らす地域でも同様の取り組みがないか、一度探してみるのが良いかもしれません。



インタビュー

世界農業遺産阿蘇の地で「幸せ」を育み広げる

2013年5月、阿蘇は世界農業遺産に認定されました。世界農業遺産とは、伝統的な農業と、農業によって生まれ維持されてきた土地利用、技術、文化風習、風景などの保全を目的に、世界的に重要な地域を国連食糧農業機関(FAO)が認定するものです。世界に45サイトあり、そのひとつとして認定されたことで、阿蘇は国内外から注目され続けています。

家族で阿蘇に暮らし、4人の子どもを育てるERIさんは、民間主導で認定に向けての動きをつくった立役者であり、また認定後も阿蘇の農村の未来づくりを牽引しています。

そんなERIさんを、建築ライターでトヨタ財団の助成対象者でもある、馬場未織さん(南房総リパブリック)に取材いただきました。

世界で唯一「ボトムアップスタート」で世界農業遺産へ

—阿蘇が世界農業遺産に認定された経緯を教えてください。

世界農業遺産の認定への動きをつくる時、一般的には農水省や地方自治体が主導するケースがほとんどという中、阿蘇は唯一、民間人が「ここって、世界的価値があるんじゃない?」と言い出すボトムアップスタートでした。

そもそもは、地元産の食材を使うイタリアンシェフの宮本健真さんが、熊本日日新聞の「熊本ブランドデザイン論文」という懸賞論文で優勝し、わたしも同じく論文を応募していたご縁で彼と知り合い、「阿蘇を世界農業遺産にしたい」という思いが一致したのがきっかけです。そこから有志の集まりで認定に向けての活動が始まり、勉強会を開催。「世界農業遺産ってどんなもの?」「阿蘇はどんなところに価値があるだろう?」と学びを深めていきました。その場には県の行政の方たちにも来ていただき、官民連携で取り組む中で、次第に県をあげて取り組むことになっていきました。

めでたく認定されたわけですが、あとは行政の方に任せてしまうというのも、もったいないし、つまらない。せっかく民間で意識を高めていったので、認定後も自主的に勉強会を続けることにしました。

一方で、阿蘇というエリアの広大さがネッ





◎ ERI(大津愛梨(おおつ・えり))

慶応大学環境情報学部卒業後、ミュンヘン工科大学大学院に留学。2003年に夫の郷里である南阿蘇村で就農。無農薬米の栽培とあか牛の放牧を営んでいる。2013年阿蘇の世界農業遺産認定に際しプレゼンテーションを行うなど、世界初の民間主導による世界農業遺産認定のため尽力した。NPO法人田舎のヒロインズ理事長。里山エナジー株式会社代表取締役。九州バイオマスフォーラム理事。2007年『日経ウーマン』ウーマン・オブ・ザ・イヤー受賞。2005年度地域社会(現国内助成)プログラム、2013年度国内助成プログラム助成対象者(代表：宮本健真)



左から太陽光発電システム、ペレットピザ窯、ペレットストーブ。ペレットは木くずを加工したリサイクル燃料

クになることも。本業や地域の仕事で多忙な農業者の方々と都合を合わせつつ、エリア内で場所を変えながら勉強を重ねるのは大変で、安定して運営するために事務局が必要だという結論に至りました。幸い、そのタイミングでトヨタ財団から助成(2013年度国内助成プログラム「世界初!地域住民が自ら盛り上げる世界農業遺産(GIAHS)——阿蘇の未来を担う民間主導の地域づくり」プロジェクト代表・宮本健真さん)を受けられて事務局を置くことができたため、年間7〜8回のセミナーを行ったり、農業×観光の体験型モニターツアーとしてレストランバスをプロデュースしたり、子育て情報誌を作成するなど多様な活動ができる環境が整ったのです。

——世界農業遺産としての阿蘇地域を守るために、幅広い活動をなさっているんですね。

世界農業遺産として認定されたのは「阿蘇地域の草原の維持と持続的農業」というものです。昔は、全世帯が家畜と家畜を放牧させる草原の入会権を持ち、草原全体を集落が管理していました。そして現在は、家畜を持つ家が激減しましたが、入会権は変わらず持っている、という状態です。このように権利関係が複雑なことが、ある意味功を奏し、草原は開発されることもなく今日まで残されたとも言えますね。

現在は集落の人たちだけでは管理が行き届かないので、「野焼きボランティア」を募って草原を守っているのが現状です。野焼きは危

ての話をすると、というものでした。

他にも、農家の価値をあげる取り組みとして、農家の自給エネルギー率を高める試みも進めています。食べ物もつくり、エネルギーもつくる、という農家になることで、農家の持続可能性が高まるからです。

生きるために必要なものを自分たちでつくれる農村になる

——エネルギー政策に興味を持ったきっかけを教えてください。

ドイツ在任時に見てきた農村社会に心惹かれてのことです。ドイツでは、チェルノブイリの原発事故をきっかけに、国策として再生可能エネルギーを増やそうと、休耕地で麦や菜種などのエネルギー用作物をつくることを推し進めています。このことで、生物多様性を守りながらライフラインを支えて食料もつくる現場”として農村の価値は上がりま

す。また、片田舎のおじちゃん「自分たちは、エネルギーも食べ物もつくっているんだ」と胸を張って言う姿は、何ともいえなかった。東日本大震災を経て、日本でも代替エネルギーの重要性がようやく認識されつつあり、今後事業化を目指していく予定です。

農村の経済を考えた時、農産物のブランドディングによる収入アップはもろろん有効ですが、一方で自治体収支の2割程度はエネルギーコストとして村外、もっといえば国外に流出してしまっているという状況もありま

ない作業ですから、安全講習などが必要であり、それを担ったのが「グリーンストック」という、阿蘇が世界に誇る財団です。安全講習からチーム分け、各牧野組合への配置など一手に引き受けています。野焼きがなされない、人工的に維持されているこの環境が保てないため、これを守っていくのが命題です。

一方で、世界農業遺産として認められたものは営農だけでなく、食、景観、文化、自然などを含めた「農村そのものの価値」であることは、忘れてはならないですね。産物のブランド化を進めて農家が儲かりさえすれば農村が守られる、という短絡的なことではなく、農村が守られるシステムをトータルで考えていく必要があります。

たとえば、世界農業遺産に関わる行政の管轄は「農政課」で、農業について考えるのは得意な部署です。一方で、農村に住んでいるけれど農業をしていない人、農地を持たない人、阿蘇が好きで子どもを農村で育てている人といった住民と関わりを持つことなどは、彼らの仕事からこぼれてしまう。その部分で民間でできればと考えたワケです。たとえば、地域のママたちともにつくった子育て情報誌は、阿蘇で子育てがたくて家族で移住してきた人たちにとって必要な情報をまとめて掲載しています。3冊出していますが、1冊目はトヨタ財団の助成でできたものです。レストランバスは、2016年4月の熊本地震からの復興支援の一環として2か月半ほど運行していました。バスの乗客に地元の食材を使った一流の料理を提供しつつ、阿蘇につい

す。エネルギーを生み出して域内でお金を循環させ、キャッシュアウトを減らすシステムをつくることは非常に重要です。熊本地震を経て、その必要性をさらに強く感じています。ここ『ジアスカフェ』も、震災の経験をもとにつくられた場で、太陽光発電システムを導入していたり、ペレットストーブを使っていたりします。

——熊本地震を経験し、カフェを運営するに至るまで、どんなことがあったのでしょうか？

世界農業遺産を、農業者のみならず、農村に暮らす人々全体の価値として考えていきたいという機運が徐々に上がりつつあったとき、地震が起きてしまいました。地震当日、自宅の屋根上に設置された太陽光パネルの売電回路が切断されてしまい、仕方なく自立型に切り替えて家の中で電気を使うようにしたのですが、そうすると使っても使っても電気が余るほどある状態となり、ラジオも聞けて、スマホの充電もできて、掃除機、炊飯器もじゃんじゃん使いました(笑)。

また、バッテリーにためた電気を直流のまま使える電球を持っていたので、地震の起きた4月16日の夜、村内が真っ暗闇に沈む中、うちの一部屋は、いつも通り明かりが灯った。それを見て集まってきた近所の人たちとお茶を飲んだり、情報交換をしたり、ソーラーラントンを近所に配ったりしました。その時、「ああ、日頃からこういう場所があればいいな」と心から思ったのです。



インタビュー●馬場未織(ばば・みおり)

日本女子大学大学院修了後、千葉学建築計画事務所勤務を経て建築ライターへ。プライベートでは2007年より「平日は東京、週末は千葉県南房総市の里山で暮らす」という二地域居住を家族で実践。2011年に農家や建築家、教育関係者、造園家、ウェブデザイナー、市役所公務員らと任意団体南房総リパブリックを設立。2012年に法人化。里山学校、空き公共施設活用などの事業を手がける。著書に『週末は田舎暮らし〜ゼロからはじめた「二地域居住」奮闘記〜』(ダイヤモンド社)、『建築女子が聞く 住まいの金融と税制』(学芸出版社)など。2011年度地域社会(現国内助成)プログラム、2014年度国内助成プログラム助成対象者



GIAHS CAFE(ジヤスカフェ)の内装。右写真の女性がカフェのシェフ

この集落は、被害そのものも少なかつたということもあるのですが、安否確認や支援物資の配達がとてもスムーズでした。というのも、この付近はもともと地域コミュニティが機能していて、近所の人たちの動向は互いに把握できているような状態なんです。一方で、そうしたつながりが希薄な地域もあり、そうなるに誰が行方不明なのかかわからず、生存確認さえとれない。日頃から付近とつながっている中で、「避難所以外に居る人はだれそれ」、「あそこのおいしいちゃんば大人用オムツが必要」などという細やかな情報共有ができる状態にあることが、どれほど大事なことか。これが骨身にしみてわかったのです。

そうした体験をきっかけに、『一般社団法人ジヤスライフ阿蘇』を立ち上げ、近隣の人たちが寄り合える場所として、『ジヤスカフェ』をつくりました。避難所シエルトという呼び名は、日常生活にはやや違和感があるのでも「カフェ」ということにして。地域の人たちがなるべく使いやすいように、お弁当を持ってきてくつろいでもらったり、地域限定公開の日を設けたりしています。ランチ提供の他、技と知恵の伝承ワークショップをしたり、昔の話の聞き取りをしたり。こういうカフェが各小学校の付近にひとつずつあつて、学校に避難してきた人たちが、有事でも変わらずそのカフェであつたかいコーヒーが飲める、となればいいなあと思っています。

よくよく考えてみれば、2.2万ヘクタールある阿蘇の世界農業遺産は、集落単位で守ってきたものの総合体です。入会権を持つ阿蘇のさくはないと実感しています。認定後4年経った今もなお、民間も行政も「ここは世界から価値を認められた地なのだ」という意識が続いており、そうした場所でも住み続けているという誇りはどこかで支えになっていると思います。特に、お子さんを育てている世代の方々は意識が高いです。

——ちなみに、そもそも農家でもなく、熊本出身でもないERさんですが、ここで暮らし始めたきっかけは？

夫が阿蘇の農家の後継者だったので。いざこれに戻ってこなければならぬ身でしたが、それを早めたのは、わたしだと思っています(笑)。わたし自身は一人っ子だったので、どうしても複数子どもが欲しいと考えていて、そうなるに東京で子育てをするイメージがまったく持てなかつた。そこで、子どもができるより前からここに移住を決めました。

大学卒業後3年半の留学をし、それから阿蘇に来た次第。やったこともない農業を知らない土地で始めるなんて苦労が多そう、と思われがちですが、就職した友人たちを見たつてみんな苦勞しているんですもの！ならば、あんまり変わらないかな、と(笑)。

——最後に、阿蘇の未来とご自身の未来について聞かせてください。

わたしは阿蘇で4人の子育てをしていて、

農業者が放牧のための草原を維持し、守ってきたもの。突き詰めて考えれば、集落の結束を強めて集落単位で残っていかれるかどうか、ということ、阿蘇の価値を守っていかれるかどうか、というのは同義なのです。

子育てをしたい地域にすることで、阿蘇の未来は開けていく

——集落という小さなまとまりの結束を高めると同時に、広い視野を持って活動を。阿蘇の未来には、その両方が必要なのです。

そうですね。先にも述べたとおり、農業者は「農業をがんばらなくちゃ」というところに意識のすべてがいつてしまふ傾向があり、それは当然のことでもあります。ただ、それだけにとどまらず、それをどうマネタイズングするか、人をどう呼び込んでいくか、といった包括的な戦略を立てる必要があります。そうした知恵を集結させるべく、全国の観光関係者を集めてシンポジウムも行いました。

たとえば静岡には、マンホールを見てまわる「マンホールツアー」をしている団体があります。これは立派な資源発見ツアーですが、そういう発想は農業者には思いつき難い(笑)。「農業農業」「遺産遺産」とこわばることとで一辺倒になってしまふと早晩頭打ちになるので、なるべく広く柔らかい発想を持てるようにしておきます。

また、世界農業遺産に認められたことが、この地域の人々のマインドに与えた影響は小ストレスがとても少ない実感があります。地域ぐるみで子どもたちを育ててくれているから、通学路で何をしていたかという話が子どもの帰宅前に伝わってきたりもします。この環境で子育てできるのは、まさにプラスです。

移住してきたわたしが、あと10年暮らしたとしても得られない感覚を、子どもたちはすでに持っています。雨の匂いとか、泥んこになって遊ぶ楽しさとか、柿が熟すタイムミングを見計らうとか。ここで楽しく育つ子どもたちの数が増え、成長して大人になった時に「ここで産みたい、育てたい」と思うことがとても大事です。そうでないと、「世界農業遺産」という冠がついたとしても、限界集落のリスト入りして細っていく未来は変わっていきません。そう、行政に任せきりにできないのは、行政は担当が変わるけれど、わたしたちはここに住み続けるんだから、やっぱり人任せにはできない！(笑)。

このカフェは、そうした思いを持ついろいろな人たちが入ってくるので、「定置網方式」と呼んでいるんです(笑)。誰もが、カフェがあり、そのまわりに家族があり、大家族があり、学校があり……というように、幸せな単位の集合が阿蘇であればいいと思います。

ちなみに、トヨタ財団の助成金でつくった事務局に就職した女性は、その後ここで結婚し、子どもを産み、あか牛を飼って暮らしています！幸せなユニットをひとつ阿蘇に増やしたと言えますね。

私たちの取り組み

—— 助成対象者からの寄稿

「農」をキーワードとして新しい価値を探り、地域づくりやコミュニティの再生に挑戦する……。助成対象プロジェクトそれぞれのユニークな活動をレポートしていただきました。



2016年度国際助成プログラム
「助成題目」換金作物栽培地域における循環型有機農業の実践に向けた若手農家リーダーの育成プロジェクト

学びあいから生まれる農家の未来

● 箕曲在弘（東洋大学社会学部/APLA理事）

換金作物栽培地域がかかえる課題

東南アジアの換金作物栽培地域の農家は、気候変動や病虫害の影響ばかりでなく、国際市場価格の変動など多様なリスクに直面している。この結果、持続可能な農業や安定的な食料確保が難しくなっている。こうしたリスクに対して、日本や他の農業先進国による技術指導を受けるだけでは、外からの押し付けになり、農家のモチベーションの向上にはつながらない。私はラオスのコーヒー産地の人びとと長年付き合うなかで、こうした課題に気付き、持続可能な農業を実現するにはどうすべきかを考えていた。

こうしたなか、私が理事を務める特定非営利活動法人APLAと協働して、フィリピン、ネグロス島のカネシゲ農園や東ティモールとラオスのコーヒー産地から、若手農家を選抜し、3か国を訪問しあうことで、農業の多様化を担う人材を育成する交流プロジェクトを立案した。なお本プロジェクトの経過は3か国各々の立場から描けるものの、紙幅の都合で、ここではラオス側の参加者のみに焦点をあてる。

選抜された3名の若手女性農家の変化

交流プロジェクトの開始直後に実施したのは、参加者探しであった。この参加者探



バナナの茎をつかって堆肥を作るシット

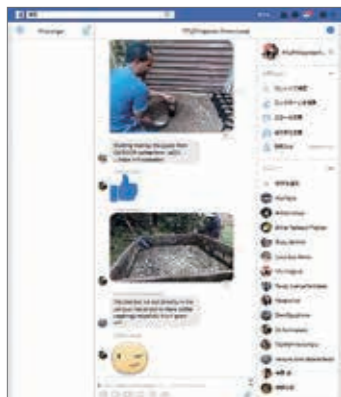
しはできるだけ民主的な過程を経ようと、現地の農民協同組合の組合員家族の中から志願者を募り、面接を行った結果、選抜するという方式にした。

APLAのスタッフである櫻井秋那が協同組合の理事会で趣旨説明を行い、その後、複数の村を訪問し、再度組合員たちに今回の企画の意図を説明して回った。その結果、面接日には6名の志願者が協同組合の事務所に集まった。組合幹部や櫻井が面接官となり、参加に対する本気度を探り、点数を集計した結果、3名の若手農家を選ばれた。私たちが驚いたのは、決定した3名が全員女性だったことだ。選抜を現地側に任せず、複数の面接官による点数をもとに決定したからだろうか、特に意図したわけではない

が女性ばかりが選ばれるという稀に見る結果となった。

ノイ、シット、タイという20代前半の3名の若手農家は、彼女たちより少しお姉さんにあたるムックさんという通訳とともに、最初はフィリピン、ネグロス島のカネシゲ農園（2017年3月）、続いて東ティモールのコーヒー産地（2017年4月）を訪問し、初めて会う異国の同世代の農家と約1週間ともに過ごした。カネシゲ農園では初めて見る循環型農業の仕組みに驚き、農園で収穫した野菜を近隣住民に売り歩いたり、燻炭づくりに挑戦したり、彼女たちは見るもの、聞くものすべてが新鮮だったはずである。

だが、東ティモール訪問時には同じコーヒー農家であったことから、彼女たちの関心はすべてコーヒーにあり、今回のプロジェクトの主題が「農業の多様化」にあることをつい忘れがちであった。彼女たちの目からみると、東ティモールのコーヒーの木はあまり実がつかず、なぜこれだけの収穫量で生活できるのかと感じていたに違いない。



参加者たちは交流プロジェクト後も、Facebookでつながり、連絡を取り合っている

とはいえ、彼女たちは今回のプロジェクトの主題を完全に忘れていたわけではない。帰国後、彼女たちは次々とSNS上に、「フィリピンで学んだことを村の組合員たちに共有した」という趣旨の書き込みを写真付で掲載した。シットは会計帳簿作成ワークショップの開催やコンポスト作成について、そのたびごとに写真に撮り共有してくれていた。こうした帰国後の彼女たちの自主的な活動を見るにつけ、私たち日本側のファシリテーターは、交流プロジェクトの成果が出つつあることを実感していった。

2017年9月には、フィリピンと東ティモールの農家をラオスのコーヒー産地に招待し、3名のラオスの若手女性農家は受け入れ側になった。その際、彼女たちは自分の農園に参加者全員を連れていき、自分が作ったコンポストを紹介する一方、彼女たちが抱えている課題を共有し、他国の参加者から意見を募った。たとえば、ノイの家では家畜の鶏が風邪をひいた際、治療法をフィリピンの農家から学んだ。実に身近にあるもの（胡椒の粒やキンマの実など）を用いて簡単に解決できることが分かり、私自身も感心した。

SNSの効果

1年間のプログラムを終えて、いくつかの成果と課題が見えてきた。とりわけSNS（FacebookやMessenger）の効果である。SNSのない時代には交流活動後のモチベーションの維持が極めて難しかった。だ



夜のふりかえりの時間

が、発展途上国の農家とはいえ、今では参加者の多くがSNSを普段から利用できる環境にある。このSNSを利用することで帰国後の参加者の活動をお互い容易に把握できるようになり、モチベーションの持続にある程度寄り、主体的な活動を促しやすいことが分かった。

ただし、SNSは参加者全員が満遍なく利用しているわけではないため、ヘビーユーザーの活動ばかりが目立ってしまい、それ以外の参加者が何をしているのかまでは共有されないという課題も残る。

ラオスの3名の若手農家たちはプログラム終了時の感想として、今後は自分たちの学んだことを、村々を訪問しながら組合員たちに伝えていきたいと希望に満ちた表情で語っていた。もちろん組合内でまだ発言力の弱い若手女性農家だけでは、この望みを実現するのが難しい。もう少し日本側からの支援が必要だと思われる。だが、将来的には私たち日本側の介入なくして、彼女たちだけで自分が理想だと思ふ農のあり方を広めていけるようになってほしいと願う。

*本プロジェクトの成果報告シンポジウムが開催されました。詳しくは28ページをご覧ください。



農福連携による 「みんなの畑」の挑戦と実践

●若尾健太郎（西東京農地保全協議会）

みんなが集う「みんなの畑」

「みんなの畑」がある東京都西東京市は、新宿から電車で30分ほどの都の中央部に位置し、人口20万人の都心で働く人たちのベッドタウンである。23区に隣接しながらも畑がまだ存在し、直売所で採れたての新鮮な野菜を購入することができる。一方で、宅地開発などにより田畑の経営耕作面積は20年間で35%減少し、2016年現在、宅地が全体の60%を占め、畑は9%まで低下している。人口は2020年まで減少しないもの高齢化率の上昇、隣近所や多世代コミュニティの希薄化、子育ての孤立、それらに伴う課題をサポートしてきた行政サービスの限界などは、全国の多くの地域と変わらない状況である。

それらの地域課題を都市農業と福祉の観点から解決していこうと立ち上がったのがノウマチ（正式名称：西東京農地保全協議会）であり、そのプロジェクトフィールドと

なっているのが「みんなの畑」である。

ノウマチは、2013年に高齢者デイサービスを運営する民間企業、地域振興コンサルタント、地元農家、市民によって、都市農業と福祉の連携を意味する「農福連携事業」を行うために設立された。設立当初は、シーズンごとに市内の農家のもとを訪れ、高齢者の野菜収穫体験などを行っていたが、2016年より住宅街の一角にある農地にて、農作業を手伝わせていただける「みんなの畑」をオープンした。

「みんなの畑」のコンセプトは、「子どもも大人もおじいさんもおばあさんも障害者もあつまり、ひとつの畑を囲み、一緒に汗を流し、ともに栽培し、管理し、収穫し、味わう。都市における「農」と「食」の大切さを感じて、人々が交じり合い、助け合うコミュニティを作り出す、農による「畑」のサードプレイス事業」としている。具体的な事業は、①市民ボランティアによる畑の運営管理補助、②障害者が畑の管理作業補助を行うこ

取り扱うことにも寄与している。

高齢者の農作業体験は、ノウマチ発足当初から行っている事業である。デイサービスに通う高齢者の方々が畑に来て、種まきや収穫を行っている。地面がデコボコとした畑で介助を受けながらも歩くこと、子どもたちやボランティアとの交流、新鮮な野菜を収穫しその場で食べることで、高齢者の心身の機能向上を図っている。

交流イベントでは、前述のボランティア、高齢者、市民、子どもが農作業、食を通じて、「ごちやまぜ」になって交流している。子どもは高齢者の手を取り収穫場まで連れていき、シニアと高齢者は子どもに昔ながらの遊びを教え、障害者はイベント会場となる畑をきれいに掃除して、お父さんはイベントを切り盛りし、お母さんは料理の腕を振るいながら障害者の家族の相談に乗るといった風景が繰り返られる。最後にみんなの畑のテーブルを囲んで、採れたばかり



「みんなの畑」は多様な人々が参加する、笑顔があふれる交流の場となっている



参加者みんなで記念撮影

とによる就労支援、③高齢者や子どもへの農作業体験の提供、④市民、障害者、高齢者が畑で一堂に会す交流イベントを行っている。

農作業・食を通じた交流

市民ボランティアは、畑の土作り、播種、害虫の駆除、草取り、収穫といった作業補助を農家の指導のもと行っている。

市民ボランティアの方々は農作業や食に興味関心のあるシニアや主婦が中心となっている。参加する動機は、「コミュニティ活動を行いたい」、「土や緑に触れたい」、「採れたての野菜を使って調理したい」などさまざまである。ボランティアのさまざまな動機をもとに、「やりたい」想いを実現させる機会

の新鮮な野菜を使った料理を食べ、イベントが終了となるときには、一つの互助のあるコミュニティが形成されている。

コミュニティモデルを目指して

約2年間の「みんなの畑」での実践を通して、子どもは高齢者の手伝いをする中で世代間交流とコミュニケーション能力を育み、高齢者は子どもの見守りと農作業によって社会的価値を見出しながら心身の機能訓練を果たし、障害者は農園管理で社会進出と就労支援につながり、シニアや市民はやりがいと自己実現を通じて介護予防やソーシャルビジネスの創出につながっている。行政の縦割り型サービスで支援していた高齢者、子ども、シニア、女性、ボランティアというものを、畑というひとつのフィールドに集めることで「みんな」に横の関係性・連携が生まれ、住民が互いに助け合うコミュニティモデルができてきた。

今後は、行政に頼りすぎない自治力のあるコミュニティの形成を目指しているものの、地域包括ケアシステムや地域共生社会の施策を打つ行政との協働関係を構築することが必要である。そのためには、「みんなの畑」の成果を視覚的に説明するための数値的根拠を見出す研究を行う必要があるが、どのように進めればいいのか手探りの状態である。今までの成果を継続させつつ、新たに生まれた課題を解決し、「みんなの畑」を日本全国に普及するような互助のあるコミュニティモデルとして確立させていきたい。

「助成題目」持続可能な社会を創る「農の営み」を通じた新しい価値軸の提示とその普及に関する実証的研究——国内の農山村と都市における実態調査と比較検討を通じて



母屋と納屋(手前)

「農の営み」を通じた新しい価値軸とは

●勝俣 誠 (明治学院大学国際平和研究所研究員)

「農」と「営み」

20世紀を世界規模の戦争と人類史未曾有のエネルギー消費による地球環境劣化の時代とするならば、私たちが今日向かい合っているのは21世紀こそ戦争を避け、持続可能な諸社会を世界各地に創り出すという課題を負った時代です。この危機に気づき、社会と環境の持続可能性を目指す新たな価値軸を提示するためには従来の価値軸をつき放して考える営みが不可欠です。そこで私たちが注目したのが今世紀、とりわけ2011年の東日本大震災以降、日本社会で顕在化した、こだわりとしての「農の営み」を伴う農村部への移住現象および都市部での家庭・市民農園ブームです。

課題のコンセプトにおいて、あえて農業としないで「農」としたのは、今日産業部門としての農業はAI(人工頭脳)やIOT(インターネット)をつなぎ合わせたモノづくり)

野の農村・都市部など多くの農の営みを実践する個人や家族や団体を訪ね、時には脱線しながらも、何時間にもわたり話し合い、いくつかのワークショップも開きました。実態調査にあたり、動機、生い立ち、営みの形態、経済的基盤など多岐にわたりましたが、あらかじめ用意した質問だけでなく、なるべく広く当事者の声や思いを時間をかけて把握しようと思いました。結果としては「道草」、「寄り道」方式と呼んでもいいこの脱線、雑談を含むスローアプローチは大いに新鮮な考察材料を提供してくれました。

持続可能な社会を目指して

こうした課題とアプローチで見えてきた「農の営み」の持つ新たな価値軸は、当面、3つの側面から示唆できます。

第一の新たな価値軸とは、たえざる市場における効率と価格競争にさらされながら達成可能となる成長優先志向に対して、この志向から相対的に距離をとれる自律空間の創出を目指す価値軸です。効率優先の労



沢から引いてきた水は誰もが自由に使える形で管理されている

などのITの進化によって、製造業や情報サービス部門に無限に近づき、従来の土と地域社会と結びついた農業概念と大きく乖離する方向に進んでいるからです。確かに、ここでは、国レベルの食糧自給、家族農業の維持、在来種子の保存などさまざまな政策的課題が待ち受けています。しかし「社会の新たな価値」を探る作業は優れて文化・文明的課題であると認識し、「農」というコトバのほうに、「業」にまつわる政策や経営論議と混同されず、生きるうえでこの「農」の根拠を探るための論点がより明確になると考えたからです。

また「営み」というコトバをあえて使用したのも「労働」としてしまおうと「賃金労働」をしぼしば意味してしまうからです。労働によって賃金を得て、その賃金で生活を支えるというキャッシュ・ネクサスとは区別される、貨幣を必ずしも媒介としない自然への働きかけや人々の助け合いという実践活

働と便利さの追求生活をあえて縮小ないしやめて、「農の営み」を手掛けた多くの人々に会いました。彼ら、彼女たちに共通していたのは、生きるうえで「農の営み」へのこだわりを、市場競争から外れた非貨幣空間で成立する個性と生身の地域的つながりを通して重視する点でした。この気づきによって、経済成長なくしては雇用も福祉もないという計量可能な価値軸(より多く働き、より得ることの自己目的化)では必ずしも把握できない、自然と人々と「今いること」の幸せないし安心感を求める質的価値軸の区別がより明確になりました。

第二の価値軸は、このこだわりの「農の営み」を支える身の丈技術の選択に見出されます。AI化によって高度なデジタルスキル修得者のみに開かれた先端技術の持つ排他性に対して、私たちが出会った「農の営み」実践者の技術にはだれもが自分の身体をフルに活用して、共有が可能な万人への高いアクセシビリティが見いだされました。ハイテクに対するローテクの復権軸とも言えます。

最後の新しい価値軸とは、自律的生活の知恵は実は古くから継承されてきた「農の営み」の中にあるということでした。高齢化が進む山間地で「農の営み」を実践する人々を訪問し観察できたことは、必ずと言っていいくらい貨幣のやり取りを伴わない生活基盤がしっかりと残存していたことでした。

たとえば水道があっても維持されている沢の水の取水槽、農具、漬物などの保存食



ときがわ町セミナー配布資料の表紙

動を可視化するため、あえて「農の営み」とした次第です。

当事者の声や思いを聞くスローアプローチ

実態調査は埼玉県の中山間部の、ときがわ町と東京周辺の都市部を中心に行われました。ときがわ町はもともと林業を中心に栄え、高齢化や過疎化という他地域で共通する課題に直面している人口1万強の自治体です。ただ「新しい価値軸」を探るという大きな課題分析と考察が、特定地域の特定事例の調査と考察からのみ導き出されないよう、これらの地域以外の人々に会って、耳を傾け、話し合うというアプローチを採用しました。

やはり中山間部の四万十川地域、関東平



菜園で野菜のおすそ分け

や家の修理用器材を保管する納屋、そして自宅周辺の家庭菜園です。道普請などの地域コミュニティの維持と並んで、これらを私たちは自給の安心3点セットと呼んでみましたが、いずれも地域の自然と共存しながら、野菜のおすそ分けなどを通して、人々のネットワークを世代を超えて維持し、豊かにしてくれる温故知新型仕組みです。

しかしこの実践研究を通して持続可能な社会を夢見る参照軸は見えてきました。この気づきを国内的、国際的に共有し、地球規模の価値創出への文化・市民社会運動として広げていく作業は今後の課題です。

真の市民社会を 市民の手でつくるために

本記事の連載2回目は、聞き手に岡山NPOセンター副代表理事などを務める石原達也さんを迎え、真の市民社会を築いていくために、私たち「市民」はどのような考え方で課題に取り組みればよいか、豊富な経験に裏付けられた山岡さんの考え方をお聞きします。



Yamaoka Yoshinori

山岡義典

1977年にトヨタ財団へ入団し、15年にわたりプログラムオフィサーとして活躍。現在は特定非営利活動法人市民社会創造ファンド運営委員長、助成財団センター理事長・代表理事、日本NPOセンター顧問などを務める

”社会全体を市民社会化する活動がこれから必要“

石原 今日「市民社会」をテーマに山岡さんのお話をうかがいたいと思います。市民社会を真に実現していくうえで今僕らがしなければならぬことは何か――。

とだと思ふ。今はニーズはないかもしれないけど、マーケティングの調査からは出てこないような物事や領域への目配りというか。アートとか国際文化交流なんてまさにそうですよね。そういうのは実際に取り組んでみる前にはニーズとしては出てこない。前回お話しした「兆しを読む」がそうだけど、そういう市民社会のもつ価値創造性はとても大事です。社会的企業は、現在の問題や課題にこたえるという意味では必要だし、重要です。でも、どんなに優れたものでも、現在だれも買ってくれないものやサービスは対応がむずかしい。現在は対価の得られないものをつくり出していく作業、たとえば芸術的な事業の最初の種を蒔くことを私たちはやっていかないといけない。課題解決型の活動とは別に、こういう考えでやれば世の中が面白く楽しくなるというような提案ができるかどうか、本当はもっと重要なことなんだと思います。行政や企業と組んでやると、どうしても現在の課題解決のための活動ばかりになりがちです。課題解決の方法は非常に洗練されてき



●石原達也(いしはら・たつや)
1977年生まれ。岡山NPOセンター副代表理事、他。NPO・市民コミュニティ財団等の設立・経営・広報、社会課題解決の取り組み企画・調査設計、共同の仕組みづくりなど、多彩な市民支援の活動を行う

ひとりの思いが尊重され、その思いが最大限に発揮できるような部分社会、それが我々が言っていた市民社会ではないかと思ふ。部分社会という意味での市民社会はこの20年、NPO法をきっかけに日本中かなりできてきた。でも、企業とか行政を巻き込んで社会全体を市民社会化する活動はできていない、まだこれからだという印象をもっています。

たと思ふ。今現在の目の前にある課題解決なら社会的企業のやり方のほうが向いているでしょう。でも、これから先の未来を考えた新しい社会をつくるのはむずかしい。今は誰も見てくれなくても市民社会はその部分を担わないといけない。未来社会に対して布石を打つ。課題解決型だけではなく、未来の価値創造型の提案。その部分の議論が抜け落ちてきちゃった気がします。

石原 市民による取り組みは、まず、新しい価値に気づいたり困難を抱える人がおり、その声を集め、気づきや苦しむ声を社会に対する「問い」にすることからはじまると思ふ。そこから組織ができ、動きができる。それができてから支援する、そして成長する。今、そんなプロセスの構築と支援のあたりはできてきているんですが、はじまりのところ、コンセプトをつくり、問いかけ、はたらきかけていく部分が弱いと感じています。最初の気づきや思いが肝心ですよね。

山岡 その通りですね。僕はいわゆる成果に対する評価論が強くなりすぎていると思ふ。気づいたり問いにするところはうまくいくのもうまくいかないものもあるけど、育てているうちに3割くらいは形になっていく。その3割の育ったところにはお金が出る。みんな形になった後の成果のところは目が向きがちだけど、僕は最初の気づきや問いかけが重要だと思ふ。お金だけの問題ではなくて、勇気づけて自信をもてるようにする。コンセプトメイキングの段階で多くの人が参加することが大切ですね。

石原 僕も同感です。一般的に、まだNPOなどの市民組織よりも企業や行政のほうが立派だ、つまり対等とはいえないという風潮がある気がします。なぜかというところ、組織が小さいから、つまり取り扱うお金の額が小さいから。もちろん事業を回すお金を得られる組織であることは大切な事ですし、お金が多くあれば大きな取り組みができるかもしれない。しかし、それが行き過ぎると営利組織と変わらなくなってしまうと思ふ。そういう意味では、たとえば、ソーシャルビジネスという言葉など、やっている人がどうということではなく、言葉自体、危うさがあると思ふ。

山岡 市民側の活動がもっと強くならなければいけない。そっちの元気がなくなると、ほとんど行政の委託事業ばかりやっている団体も多い。委託事業に限らず高齢者の福祉、障がい者福祉とか子どもの学習支援でも、行政系のお金を使う団体ばかりが大きくなっていて、先駆的な自主事業は弱まっている感じがしている。

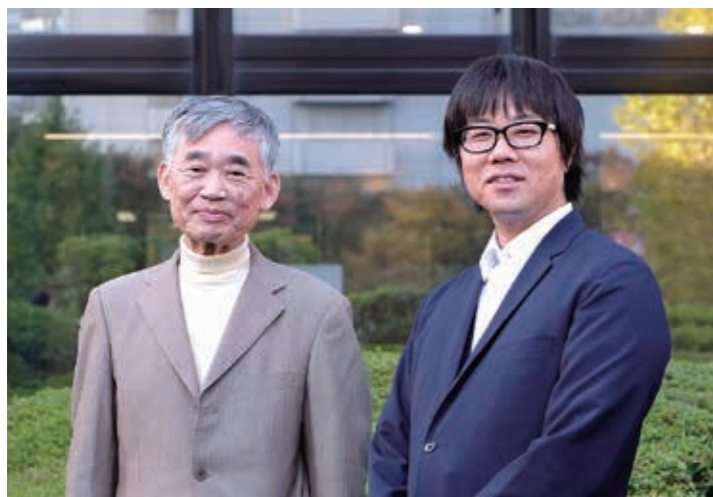
石原 そういうことに引張られて、企業や行政に対して市民という立場で違う意見が言えなくなってしまう、弱い立場ならでは役割を果たしづらくなっていますよね。

”今現在のための課題解決型から
もっと未来の価値創造型を“

山岡 僕は市民による社会活動の大切な役割は、現状と同時に未来をつくる視点をもつこ

トヨタ財団も公募の助成では各地の取り組みを支援していて、それはそれで大切だし面白いと思ふますが、全国の市民社会全体を刺激して何か影響を与える、関与するようなプログラムもやってもらいたい。NPOのネットワークを強化するような助成をするというのも重要だと思う。それぞれの地域社会の先進事例を追うのも重要だけど、ネットワーク全体で新しい動きをつくりだせるような助成が、トヨタ財団ならできるのではないかと思ふ。

石原 ネットワーク形成とアドボカシー（政策提言）機能、そして何よりも創造性を強化していくことが、これからさらに必要ということですね。ありがとうございます。





活動地へおじゃまします!

沖縄・八重山諸島を訪ねて

「伝統の森」を継承していくために

◎楠田健太 (トヨタ財団プログラムオフィサー)

名蔵御嶽の倒木

沖縄本島

2017年12月7日から10日にかけて、肌寒い東京を離れ、比較的過ごしやすい気候の沖縄・八重山諸島を巡りました。対象となるプロジェクトは、現在国際助成プログラムの枠組みで助成を行っている「山・川・里・海を繋ぐ日・韓・台の『伝統の森』文化の保全と絆」です。

「伝統の森」を守れ

東アジアでは、人々と関わりあいながら、畏敬の念が払われ、地域で大切に守り育てられてきた「伝統的な森(杜)」の文化が広く存在します。多様な動植物の棲息地として生態的な価値はもちろん、祭祀や巡礼の場として、あるいはエコツーリズムや防災林としての役割など、それは人々にとっても重要な意味をもつものでした。近年そうした認識が薄れ、森の保全が困難になっているという問題意識から、日本・韓国・台湾の3か国において、研究者、樹木医、NPO、そして地域住

宮古島

石垣島

竹富島

西表島

民らが有機的に連携しながら生態調査を行い、具体的な解決策を提示・実行するとともに、映像や書籍といった成果物を通して森の持続的な保全に資することが本プロジェクトの目的です。
プロジェクト代表者の李春子さん(神戸女子大学)は、韓国と台湾の大学を卒業後、日本の大学院で「鎮守の杜」をテーマに学位を取得しました。専門的な知見を持ちながら、韓国語・中国語・日本語を流暢に駆使して調査を行う李さんは、まさにこのプロジェクトに打ってつけの人物といえるでしょう。この度、約20年にわたって活動を続けてきた彼女のいわば集大成として、本プロジェクトが「アジアの共通課題と相互交流」をテーマに掲げる2017年度国際助成プログラムに採択され、昨年11月から活動を行っています。今回の沖縄では、現地の森の調査やプロジェクトのキックオフシンポジウムを含む、盛りだくさんの活動が実施されたのです。

【訪問地】
沖縄・八重山諸島
【助成題目】
山・川・里・海を繋ぐ日・韓・台の「伝統の森」文化の保全と絆



竹富島の水牛車

自然への深い信仰の中に暮らす人々

ここ沖縄で、森と人々との関わりを考える際に最も重要なキーワードの一つが「御嶽」です。御嶽とは沖縄において信仰の拠り所となる聖域の総称。各集落の樹木や森を祀ったもので、古来より豊作や無病

息災を祈る祭祀の場として、あるいは儀礼を司る文化の発信地として大きな役割を果たしてきました。訪問した八重山地方では「おん」とも呼称され、石垣島だけで今も大小合わせて約100の御嶽があるとされています。形態としては入り口に鳥居、その先には拝殿があります。さらに奥にはイビと呼ばれる石積みで囲まれた空間があり、ここに神様が降臨すると考えられています。

祭祀などの神事を執り行うのは、それぞれの御嶽に存在する「司」と呼ばれる神職者。司になれるのは限られた血統で、かつ神から宣託を受けた女性に限られます(ただし後継者不足から、司不在の御嶽もある)。男性はそもそもイビには立入禁止で、竹富を案内していただいた亀井保信さんによると、万一その法を犯してしまったら男性の局部がパンパンに腫れてしまうのだとか。イビには通常簡素な香炉が置かれているもの、それ以外に「物」としての神体や偶像が一切ないものも大きな特徴で、木や森が茂る空間そのものに対する畏敬の念が見てとれます。

調査中、何名かの司の方にお会いする機会を得ましたが、「霊能者からあなたが司だと言われた。何も疑うことなく司になった」、「昨夜、木の神様の声がずっと聞こえた。涙が止まらなかつた」といった超自然的な話が当たり前のように島民たちと繰り広げられ、木々や自らを取り巻く自然への深い信仰の中に暮らす人々の姿に大きな感銘を受けたのです。



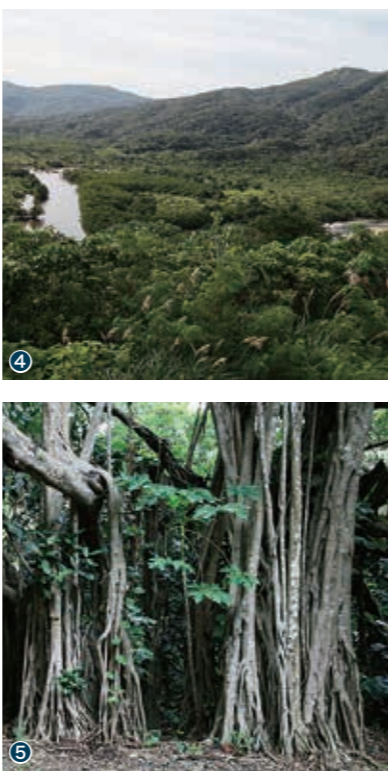
鳥居と拝殿、美崎御嶽(左)と、石積みで囲まれたイビ、天川御嶽(右)

南根腐病の実態

今回、日本・韓国・台湾のメンバーからなるプロジェクトチームは、石垣島・竹富島・西表島の八重山三島の約20の御嶽において、詳細な実態調査を実施しました。結果、そのうち少なくとも5つの御嶽で、木々が「南根腐病」という深刻な病気に侵されている事実が判明しました。

南根腐病とは、症状としてはまず全株の黄化、次いで萎み、最終的には枯死してしまうというもので、突然の倒木により人や建物等に被害を及ぼす危険性もあります。罹患した樹木には、黄色から茶色の菌糸面が表面に現れるのが特徴ですが、根部の菌糸面は泥と砂土が混ざっているので専門家でないとなかなか正確な診断ができません。また、放置しておけば根を介した隣木への直接的な感染のみならず、子実体の空気中への飛散により、広範囲にわたって被害が拡大し、集落の森全体が枯死し裸地化してしまう恐れもあります。

この病気は、1928年に台湾で初めて発見されたということもあり、その経験や対策にあたっては台湾に一日の長があります。今回台湾から来日したプロジェクトメンバーの一人・傅春旭さん（行政院農



①南根腐病に侵されたクワノハエノキ、根部分が褐色化している。宮島御嶽。②仲間川のオヒルギ、西表島。③西表の山道を歩く。④仲間川展望所からの眺め、西表島。⑤ガジュマルの木、小濱御嶽。⑥意見交換会、竹富島まちなみ館。⑦調査を行う李さん(奥)と傅さん、長崎御嶽。⑧シンポジウム、石垣市民会館

業委員会林業試験所・研究員)は調査の後、石垣で開催されたシンポジウムで約100名の参加者に向けて、御嶽の具体的な罹患状況を解説しながら、汚染した土壌の除去、燻蒸消毒、貴重な老樹に対しては外科的な治療といった早急な対応の必要性を訴えたのでした。

小さな積み重ねから大きなうねりへ

期間中、本プロジェクトの調査のことが、三度にわたって地元紙(八重山毎日新聞)の紙面を飾りました。その記事を見てシンポジウムに駆け付けたという方も多数おり、この問題の所在は、確実に八重山の地域住民の方々へと認知されることになりました。

また、竹富島で行われた意見交換会には、島民の約10分の1にあたる30名超の方が参加し、熱心に議論が行われました。結果、島民自身の議論により、年に2回の祭りの際に、木に巻き付いて被害を及ぼす葛を島民皆で取り除こう、ということがその場で合意されたのでした。葛を取り除くということ自体は竹富の中でのほんの小さな行為ですが、こうした小さな具体的成果を着実に積み重ねていくことが、やがて大きなうねりになっていくのでしょう。島民たちの熱気にあふれた議論と、自分たちの島を守りたいという主体的な意思を目の当たりにして、私も思わず胸が熱くなりました。

シンポジウムや意見交換会に加え、今回の調査結果は、石垣市役所の担当部長にも直接報告を行っています。報告を受け、今後行政がどのような対応を行うかということについては、今回地元紙の記事を発信しつつつけてくれた記者が引き続き取材を行うことになっています。研究者や専門家といった、限られた少数の人だけで地域を動かすことはできません。当然、真の当事者である地域住民や行政の参画や協働が不可欠なわけですが、その意味で今回の訪問は実りあるものになったといえるのではないのでしょうか。確かな手応えをプロジェクトメンバーも感じているようでした。

補うあつ、議論を深め、歩むあつ

地域課題を解決するにあたって、「ヨソ者」の存在の重要性はつとに指摘されることです。地域の側から見ると、出身地も抛って立つ

バックグラウンドも異なる李さんらプロジェクトメンバーは紛れもない「ヨソ者」なわけですが、その力が効果的に発揮されることが、プロジェクト成功の鍵となります。本プロジェクトでは今後、同様の活動を台湾・韓国でも実施予定です。パズルのピースがびたつとはまるように、お互いにとって足りない部分は補い、強みは十全に活かすことで、国際助成プログラムのめざす双方向的な学びのサイクルが生まれ、それぞれの地域で変革が促されることを期待しています。

印象的なシーンがありました。御嶽の調査中、木の表面にシロアリの痕跡をメンバーが見つけたときのこと。前述の台湾出身・傅さんは、このまま放置しておくとも木が枯れる、早急に駆除すべし、との見解を示しました。それに真っ向から異を唱えたのが、日本からのプロジェクトメンバーで普段は温厚な樹木医・森陽一さんでした。曰く、「自分がそれを征服できる技術を持っているからといって全ての状況でそれを使おうとするのは人間の驕り。この程度の喰い跡なら何の問題もない。シロアリにはシロアリの、森の中で分解者としてのれっきとした役割がある。そんなものは適度に放っておくのがよい。何でもかんでも排除して解決しようとするのは誤りだ」と。素人ながら個人的には森さんの考えに大いに共感してしまうのですが、このような状況で必ずしも単一の確立された正解があるわけではありません。各地域の事情はもろろん、互いの国の文化観、宗教観、個人のバックグラウンドに左右されることも多いでしょう。

ただ、こうした状況に遭遇したときに黙ってやり過ごすのではなく、お互いの考えをぶつけ合いながら議論を深めていくことが、プロジェクトチームとしての成長となり、ひいてはプログラムが副題として掲げる「学びあひから共感へ」とつながっていくでしょう。

最後に4日間という限られた時間で、石垣・竹富・西表の三島を歩き来しながら、約20か所の御嶽調査に加え、3つのマングローブ調査、それらの調査結果を即時反映させて2度のシンポジウム、島民との意見交換会、そして急遽アポを取り付けて市役所に直談判と、朝早くから夜遅くまで精力的に活動を行うメンバーの皆さんに敬意を表するとともに、これから約2年間のプロジェクトに微力ながら伴走したいと思えます。

人 との出会いが研究やプロジェクトのゴーストに思えることがある。現在トヨタ財団からの助成を得て私が行っているプロジェクトは、消滅危機にある琉球(諸)語を書くためのフォントを作ろうというものだが、これが実施できると思えたきっかけは、あるフォントデザイナーを紹介してもらったことだった。

2年前に琉球語用の表記法を考えて『琉球のことばの書き方—琉球諸語統一的表記法』(くろしお出版)という本を出版した段階で、ワープロソフトやウェブ上で特殊な記号と仮名文字を組み合わせた文字を取り扱うためのフォントを作る必要があるのはわかってはいたが、作成費用やデザインの問題があった。フォントというのは漢字を除いて仮名文字で作ったとしても、デザイン料など相当な規模の金額が必要で、いわゆる文系の研究費では賄えない規模なのである。しかもすでにパソコンに搭載されている漢字フォントと混ぜて使っても見栄えの良いデザインで作る必要がある。

だが、そのフォントデザイナーは有名なOSに標準搭載されているフォントをデザインした経験を持ち、かつプロジェクトの趣旨に賛同して業界の常識よりも安い金額でプロジェクトの実現に協力して下さる方であった。正直、私が積極的にそういう方を必死に探して存在を知ったとか、無理を重ねてコンタクトを取ったとかいうわけではないが、知り合う機会を得たのである。

ような出会いの経験があつて、私は人との出会いをきっかけに研究やプロジェクトを進めてきたと自覚(自負ではない)している。

ちなみに、素敵な出会いがあつた時には自分を鼓舞するように「いい風吹いてる!」と叫ぶことにしている。

こうなってくると、特別に何々教という宗教を持つていないわけではないのだが、神様みたいなものがあるんじゃないかと思えてくる。神様じゃないにしても「草葉の陰から見守っている」と言い遣して亡くなった祖父あたりが、本当にその辺にいないのではないかと思えるほどである。

実際そういつたよくわからない、見えな力のようなものを感じる(感じた気になる)経験というのは研究生活にとっても生きていくうえでも悪くないことだと思っている。仮に研究やプロジェクトで困難な状況が発生したとしても、一生懸命やればきっと何か助けてくれる人もいるだろうというポジティブな気持ちになるし、感謝の気持ちを忘れないので、自信過剰になつたり自分が偉くなつたと思つたりは絶対にしないからである。結局、これはいわゆる宗教が与えてくれる効果と同じようなものだろう。私がそういつたところに自分なりの精神的な拠り所を見出だしているということなのだろうと思う。

最 近も「天の声」があつた。昨年あたりから、九州のある地点(〇〇県×

「私」のまなざし 20

偶然と人の輪が未来を紡ぐ

文・写真◎小川晋史
熊本県立大学文学部



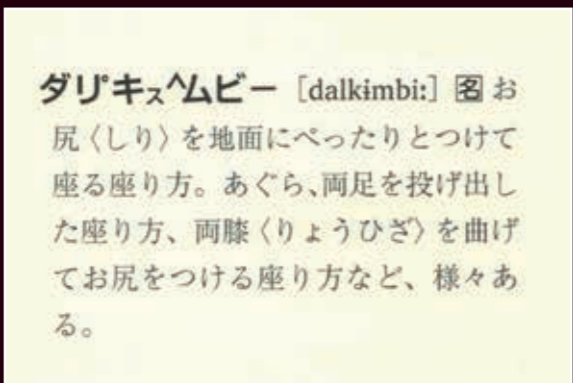
沖縄で琉球語の表記法に関する発表をする著者



『琉球のことばの書き方—琉球諸語統一的表記法』(くろしお出版)



『たらまふつ辞典—多良間方言基礎語彙』(多良間村教育委員会)



表記法が使われた『たらまふつ辞典』の見出し語の例

タイミングもちょうど良かった。表記法ができてすぐにフォントに取りかかるわけにもいかない。表記法がある程度使われ始め、使えるものだといいことが示せなければフォントを作るといふプロジェクトに説得力がないし、実施のための資金も集まらなかつただろう。そう思うと表記法を考えてから2年というのは絶妙としか言えない。その表記法を用いたいくつかの方言辞書や印刷物が出始めている時期だったからである。

偶

然をキーワードとした場合に、研究の世界では似たような事例として、実験中に予定外の操作をしてしまったことがきっかけで有益な物質を発見できたという類のエピソードも聞いたことがあるわけだが、それとも少し違う。一生懸命にいろいろ実験をしたり情報提供を求めたりするなど試行錯誤している最中の出来事ではない。私は「脳内の小人さんに預けている段階」と表現するのだが、なんとなく自分の頭の中だけにとどめているという段階だったのに、劇的にそのことが進みきっかけとなる出会いを得るのである。

念のために言っておくと、何十という計画を常に頭の中に持っていて、その中の1つがうまくいきそうだからやるのだという話でもない。頭の中にはせいぜい1つか2つしか計画がないようなところに、まさに「天の声」としか思えないような出会いが起きるといふ話である。他にもいくつか同じ

×町としておく)で研究のための方言調査をしたいと思いついた。それも単発のイベントではなく継続的に調査をしたいので、縁もゆかりもない土地に何を手がかりにして調査に入っていくか、誰にコンタクトを取るかということは大それた頭の隅に置いていた。そして先週、沖縄県で行なわれた某賞の授賞式に出席することになり、会場で知り合った方と話をしていたのだが、その方が言うには「実は私は〇〇県の出身で、親が××町で教育長をしています」とのことだった。それを聞いた時の自分の表情は笑顔ではなかったと思う。多分、当惑していたと思う。確率論で測れるだろうか(実際は測れるから確率論な訳だが、測つても相対的に低い確率だろう)。

こういう感じで、自分でも読めない部分を残したような行き当たりばったりとも言える研究スタイルでいいのかわからない。君、計画性ってことば知ってる? というお叱りの天の声があつてもいいような気がするが、結局このエッセイもそういう感じの出来事があつたのをきっかけにテーマを決めて書いているのだから困つたものである。

●小川晋史(熊本県立大学文学部)
2017年度社会コミュニケーションプログラム助成対象「琉球諸語統一的表記法」の発表と電子的な利用の普及
2011年度研究助成プログラム助成対象「琉球諸語表記法プロジェクト—多様な方言からなる琉球諸語を統一の規格で書き表わせる—」の発表と構築と今後の普及のための基盤づくり」

多文化共生について考える

「あいち多文化ツアー2017に参加して」

●加藤 剛(トヨタ財団プログラムオフィサー)

2017年11月18日、愛知県名古屋を訪れました。2015年度国内助成プログラムの助成対象プロジェクト「DIVE.tvプロジェクト」多文化市民メディアを活用した日本人と外国人のコミュニケーションの促進」(代表…牧野佳奈子)の一環として行われた、「あいち多文化ツアー2017」に同行するためです。本プロジェクトは、動画サイトの運営やイベント等の事業を通じて、日本人と外国人が、国籍や文化の違いを超えて、共に地域社会づくりに貢献するとともに、外国人が日本社会の中で活躍することを目的としています。

愛知県は、全国で2番目に外国人の数(約22万人)が多く、県内総人口に対する割合(約3%)も東京に次いで2番目に高い県です。リーマンショック直前にピークを迎えた後、いったん減少しましたが、ここ数年は人手不足を背景に、製造業や建設業、外食・小売りなど幅広い業種で外国人の雇用が拡大。リーマンショック前の水準に戻りつつあります。出身地別に見ると、1位ブラジル人(約51万)、2位中国人(約46万人)、3位韓国・朝鮮人(約33万人)、4位フィリピン人(約33万人)、

5位ベトナム人(約18万人)となっています。

あいち多文化ツアー

「あいち多文化ツアー」は、昨年に続き2回目の開催で、中京大学国際教養学部渋谷努さんのゼミとの共催で実施されました。今年は、初日に名古屋朝鮮初級学校と栄フィリピン人街の視察、2日目に津島市にあるモスクでイスラム教の人たちとのワークショップ、そして名古屋市港区の日本語教室でことばゲーム大会というツアー内容。私が参加した初日には、東北学院大学と東海大学の学生計21名が参加しました。

DIVE.tvは市民メディアを事業の柱にしており、事前に送られてきた「旅のしおり」には、在日外国人の基本情報やゲストスピーカーの紹介に加え、名古屋朝鮮初級学校紹介の動画や在日フィリピン人についての解説動画につながるQRコードも印字されていたのが特徴的でした。DIVE.tvのホームページ(<http://dive.tv/nagoya/>)には、多文化について楽しく学べる動画がたくさんありますのでぜひご覧ください。

朝鮮文化

最初の訪問先、名古屋朝鮮初級学校(日本の小学校に相当)では、在日朝鮮留学生同盟(朝鮮半島にルーツを持つ大学生・専門学生が集う団体の)の学生さんと合流し、3つのグループに分かれて授業の様子を見学しました。

まずは、1年生の国語(朝鮮語)のクラス。意外だったのは、家庭内では普段日本語で話しているため、朝鮮語は入学して初めて勉強する子がほとんどということ。「誕生日に食べたいものは? (朝鮮語)」という先生の質問に対して、22人の生徒が元気よく手を挙げて答えていました。「お寿司!」、「ケーキ!」、「そば!」と、回答が日本語だったときには、先生が朝鮮語で丁寧に教えていました。ちなみに、学校内では、日本語の授業以外では日本語は禁止されているそうです。次に見学したのは3年生の日本語の授業。川村たかしさんの「サーカスのライオン」を題材に、段落や語句について学んでいました。

授業見学の後は、図書室にて韓国食材店「ナリタ」提供のランチをいただきました。この後の対談に登場する成田政達さんのお店です。どの料理も美味しかったです。特に5種類もあったキムチ(切り干し大根、大根・ゆず、蓮根、白菜、スルメ)が私のお気に入りです。

昼食後は同じ図書室で、「マイノリティとして生きる」これからの在日コリアン・2人の物語」というお題の対談。プロジェクト代表の牧野さんのファシリテーションのもと、前出の成田さんと宋亜弓(ソン・アグン)さんのお話を聞き、在日コリアンについても、多様性があるということを知

初めて知りました。成田さんは、日本の公立学校で学び、在日であることに対して、「後ろめたさ」を感じながら育ち、結婚するときも在日コリアンである自分が日本人に受け入れられるか心配だったとのこと。その後、韓国が大好きな今の奥様との出会いをきっかけに自信を取り戻していかれたそうです。宋さんは、小学校から高校まで朝鮮学校で学び、卒業後は朝鮮舞踊のダンサーや、ピラティスのインストラクター、韓方茶の専門家として活躍してこられました。在日コリアンの社会の中で育つため、アイデンティティに悩むことはなかったそうです。出産する25歳ごろまで、「日本人の友達がいなかった」というのには驚きです。

対談の後は、学校の最上階にある講堂で朝鮮舞踊部の練習を見学し、朝鮮初級学校を後に。名古屋駅に向かう途中、駅前にある韓国食材店「ナリタ」に寄って、お土産にとうもろこし茶とキムチ9種セットを購入しました。

フィリピン文化

地下鉄で栄駅へ移動し、徒歩で池田公園近くのフィリピンパブに到着。営業前ではありながらも、白で統一された内装やカラオケのステージ、ミラーボールが非日常的な空間を作り上げていました。

ここでお話されたのが、フィリピン移住者センター(FMC)の石原ヴァージさんとネストール・プノさんです。日本には数多くのフィリピン人が出稼ぎに来ていて、弱い立場に置かれていることが少なくありません。そこで、FMCは、設立された2000年から日本に住むフィリピン人の家庭問題や教育、労働、医療に関する相談に日々対



フィリピン人移住者センター代表の石原さん(右)



フィリピンパブで名古屋市のフィリピン人の状況について話すネストールさん



左からDIVE.tvの牧野さん、ゲストの成田さん、宋さん



韓国食材店「ナリタ」のスペシャルランチ

応しています。最も多い相談の一つが、日本人男性による家庭内暴力（DV）被害です。フィリピン女性は、稼働の一部を母国の家族（親族）に仕送りしているのですが、これが旦那さんに理解されず、喧嘩の原因の一つになっているそうです。そして、DV被害にあったとしても、在留資格のために離婚できず、問題を抱え込んでしまう女性が多いのだとか。FMCのこれまでの活動が評価され、2016年度、愛知県弁護士会人権賞を代表の石原さんが受賞されました。石原さんが「救急車みたい」とこれまでの活動を表現されていたのが印象的でした。

市民活動推進センターに集合し、振り返りの時間です。まず、各グループのフルーツ当てから始まりました。私が同行した学生たちの封筒にはマンガスチンの写真が入っており見事当てていましたが、別のグループは竜眼をライチと間違えるなど難問もありました。そして、同じグループだった人以外と「フルーツポンチ」（ー）になるような新しいグループを作り意見交換。

朝鮮学校で印象に残ったこととしては、「在日」という特殊で複雑なアイデンティティについて知ったこと、朝鮮半島に関するニュースに対して複眼的な視点を持つことの重要性などが挙げられました。また、フィリピンパブの話からは、物価の差を知らずに来日し、困難な生活を強いられるいるフィリピン人の存在に驚く学生や、身近（仙台）にもフィリピン人がいることに気が付かされた参加者もいたようです。牧野さんは最後、「これからもこういった多文化の現場に足を運んでもらえたらと思う。多角的な視点が得られる。土壌を耕すように、肥やしにしてほしい」と締めくくりました。

振り返り

お二人のお話をうかがった後、参加者は5つのグループに分かれ、グループごとに別々のチェックポイントで封筒をもらい、中に入っている南国フルーツの写真の名前を当てるといふ任務が言い渡されました。チェックポイントは、モンゴル料理屋やフィリピン食材店など、今回のツアーの協力店舗で、店長や店員さんと話すことで、より多文化な街を楽しめる仕掛けになっていたのです。チェックポイントに立ち寄った後は、名古屋市中

私も今回参加してみて、さまざまな文化背景をもつ人たちの暮らしの現実を学ぶことができ、多文化社会である日本について新たな視点を獲得することができました。本プロジェクトは、2018年3月で助成期間が終了する予定ですが、牧野さんは来年度、DIMEのインターン生に同様のツアーを企画してもらいたいとのことでした。今後もちょういった企画を通じて、多文化社会の担い手が育つことを期待したいと思います。



グループごとに初日を振り返る学生たち



振り返りのテーマを与える中京大学の渋谷さん

第七回

世代を超えて人が集える共同浴場

日常の触れ合いが地域と人を育む

◎加賀道（トヨタ財団リサーチフェロー）



窓からの風景。雪が積もってないかどうか恐る恐るカーテンを開けます

実家のある宮城県鳴子温泉で在宅勤務生活を送っている私は、毎晩、徒歩2〜3分の距離にある共同温泉浴場に子どもたちと通っています。大きなお風呂を持

参し、子どもを引き連れ大きなバツグを下げ、時には頬被りして歩く姿はまるで昭和の風景のようで、我ながら吹き出してしまいうこともあります。

共同浴場は、滾々と湧き出るお湯そのものが豊かな資源であり地域の宝ですが、そこでは、お湯を目当てに集った人々が活き活きと交流し、それこそが宝ではないかと感じることもよくあります。野菜の植え付け時期の話、収穫した野菜の調理方法、流行っている風邪の症状など、さまざまなことを情報交換しながら一日の疲れや汚れを流し、温泉に浸かります。

特に、子どもたちにとって共同浴場は格好



共同浴場に通うのが楽しみな子どもたち

の学びの場です。子どもが少なくなつたこの地域では、3歳と5歳の息子たちはとても可愛がられ、温泉でさまざまな人と触れ合うことで日々成長しているように思います。「おぼんです」「こんばんは」「お先します」「おやすみなさい」「ごゆっくり」といった挨拶のシャワーを毎晩浴びることで、挨拶が苦手な長男も、自然と挨拶を身に付けてくれるのではないかと期待しています。そして、さまざまな人と風呂に入ることで、若い人、年を取った人、太った人、痩せている人など、多様な人の存在をまさに肌で感じているようです。時には、近所のおばあちゃんの大きなおっぱいを触らせてもらえる（！）こともあります（おぼあ

ります（おぼあちゃんも嬉しそうで、皆が幸せな気分になります）。先日はこんなことがありまして。浴場で体を洗っていると、3歳の息子が急に私からすたすと離れ、80代

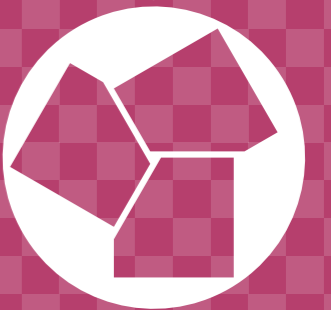


準喫茶カガモクもすっかり冬の様相です

の顔なじみのおぼあちゃんの目の前にしやがみ込みました。たらいの中を指さし、「これなあに？」とじつと何かを見つめています。おぼあちゃんは、「ぼあちゃんの歯だ

よ」と事も無げに一言。息子は、初めて見る「取り外し可能な歯」に衝撃を受けた様子でしばらく固まった後、たらいの中身と、本来歯があるはずのおぼあちゃんの口元を何度も交互に見つめていました。その後、堰を切ったように「何でできているの？」「お口見せて」などとおぼあちゃんを質問攻めにしていました（その後、息子はあれほど嫌がっていた歯磨きを進んでするようになりました・笑）。やり取りの一部始終を見ていた私は、年齢差80歳はある二人の会話がおかしくて仕方ありませんでした。高齢化社会になつたとはいえ、なかなか人様の入れ歯をまじまじと見る機会はないのではないのでしょうか。ごく自然に世代を超えた交流を、しかも裸でやっている我が子を見て、いい環境で育っているなあとしみじみ感じた瞬間でした。

このような小さな出来事の積み重ねがくらしの豊かさを形作っているように思います。お風呂という日常生活の一部が交流の場でもあることは、私が自慢したい地域の宝です。



【国際助成プログラム】
シンポジウム「学びあいが生み出す農家の未来」に登壇

2 017年12月16日、東洋大学にてシンポジウム「学びあいが生み出す農家の未来」が開催されました。本シンポジウムは、2016年度国際助成プログラムで助成を行った「換金作物栽培地域における循環型有機農業の実践に向けた若手農家リーダーの育成プロジェクト」（代表者：箕曲在弘）の完了を受け、プロジェクト成果を広く公開するとともに、その意義を振り返るというものです。

をグループ指導中心に学ぶNPO向け講座です。8月まで全5回の講座終了後、受講生は自組織の問題解決に取り組んできました。今回は、その取り組みの内容と成果についてトヨタ式A3資料でご報告いただきました。**会**の前半は、4グループに分かれての発表。後半は、各グループの代表1団体による全体発表が行われました。代表4団体のテーマは、「運営における理事の関わりの上昇」（NPO法人アジャスト 清長豊氏、清長摩知子氏）、「お宝資産2.5向上による損益防止」（NPO法人あなたの街の

プロジェクトでは、フィリピン、東ティモール、ラオスの若手農家たちがそれぞれの国を訪れ、実際に交流を行いながら、コーヒーやサトウキビといった単一換金作物栽培が引き起こすさまざまなリスクから脱却し、持続可能な農業のモデルを自らの地域に根づかせるための実践活動を行いました（10ページ参照）。シンポジウムでは、期間中各国ファシリテーターとして活躍した（特活）APLAの若手スタッフ寺田俊氏（フィリピン担当）、野川未央氏（東ティモール担当）、櫻井秋那氏（ラオス担当）、そして代表者である箕曲氏が報告を行いました。続いて、同じく交流プロジェクトを実施するNPOの立場から下田寛典氏（日本国際ボランティアセンター職員）、研究者の立場から阿部健一氏（総合地球環境学研究所教授）、助成財団の立場から楠田がそれぞれコメントを加え、最後に登壇者全員での討論フロアを交えた質疑応答が行われました。質疑では特に、こうした交流系のプロジェクトでなかなか定量化・可視化しづらい「成果」をどう考えるかということに関心が集まりました。プロジェクト終了時点では目に見える成果がなかったとしても、たとえば10年経ったときに振り返れば、あのとときの交流経験があったからこそ、ということはいくつも起ります。その意義をどう捉えるか、ということについてヴィジョンの共有の重要性やフォアキャストとバックキャストの組み合わせ、「感動」を生み出す国際協力における演劇的モデルの提唱など、多様な論点が出されました。

「三河や」さん北村佳子氏、金井理氏）、「企業訪問メンバー数の拡大」（NPO法人学校ICTサポーターズ 重金晋氏）、「持続可能性のあるコミュニティを構築するために収益の安定化」（レイブクラシス・ネットワーク 岡田実穂氏）とバラエティに富んだものでした。どの団体も設定したテーマに対して、現状把握、要因解析、対策立案・実行、効果の確認、標準化のサイクルを半年間で実践し、一定の成果を得られたと報告していました。岡田氏は、「はじめは問題を数値化することへの抵抗感があった」そうですが、数値化し、

突 き詰めて言えばこのプロジェクトは、3か国数名ずつの若者が1年間交流を行った、ということに過ぎません。しかしその過程はファシリテーターらの尽力により誰にでも参照可能な形で百数十ページの報告書にまとめられ、写真や映像など多様な媒体にも記録されており、かつSNSを通じたメンバーの交流は今も続いています。今回の公開シンポジウムも含め、これら成果「物」が種となって、こうしたプロジェクトの意義はむしろ終了後にこそ花開いていくのだろう、と個人的に感じています。（楠田）



【国内助成プログラム】
2017年度トヨタNPOカレッジ「カイケツ」講座

2 017年11月28日、トヨタ産業技術記念館大ホールにてトヨタNPOカレッジ「カイケツ」第二期の成果発表会を開催しました。トヨタNPOカレッジ「カイケツ」は、トヨタ自動車の「問題解決」という考え方・手法

見える化することで、団体のリソース配分を改善し、精神的にも余裕が出てきて、改めて自団体の強みを活かした事業に注力することができるようになったそうです。講師を務めたトヨタ自動車業務品質改善部主査の古谷健夫氏は、最後に「ビジョンなきところにカイケツは生まれぬ」とその理念を語り、問題解決に必要なこととして「見える化（問題の共有）」、「根回し（理解活動）」と説明されました。当財団ウェブサイト当日の古谷講師の資料を掲載しています。ぜひご覧ください。（喜田）

PUBLICATIONS

2 016年度国際助成プログラムの助成対象プロジェクト「アジアにおける加害者家族の現状と支援に関する共同研究——日本、韓国、台湾を中心として——」（代表者：阿部恭子）より二冊の書籍が刊行されました。『息子が人を殺しました——加害者家族の真実』は、2008年から現在まで1000組

以上の加害者家族を支援してきた著者による、はじめての一般向けの書籍。加害者家族の実情をいくつものストーリーとともにわかりやすく綴っています。もう一冊は『性犯罪加害者家族のケアと人権——尊厳の回復と個人の幸福を目指して——』。日本で初めて加害者家族支援団体を設立したNPO法人WorldOpenHeartの阿部恭子氏が性犯罪加害者家族の実情と支援の必要性について語ります。



息子が人を殺しました
——加害者家族の真実
●発行：幻冬舎新書
●著者：阿部恭子
●価格：800円＋税



性犯罪加害者家族のケアと人権——尊厳の回復と個人の幸福を目指して——
●発行：現代人文社
●著者：阿部恭子
●価格：2,500円＋税

訃報

豊田達郎名誉会長

トヨタ財団の第2代会長として1998年から2011年までの13年間の長きにわたり当財団の代表を務められた豊田達郎名誉会長が、昨年12月30日88歳で逝去されました。豊田名誉会長は、1995年に病氣療養のためトヨタ自動車の社長を退かれた後、同社副会長、相談役を務められる傍ら、トヨタ財団の会長として生活・自然環境、社会福祉、教育・文化、国際交流・協力等に関する研究及び事業に対する助成事業を精力的に推進し進められました。心よりご冥福をお祈りいたします。



名古屋朝鮮初級学校を訪れた際に見かけた太鼓に描かれた龍(P.24参照) [T.K.]

[編集後記]

LAST WORD

●最近、「人生100年時代」「働き方改革」「副業解禁」といった活字をよく見る。国も、本年度内には副業・兼業の事実上の解禁に踏み切るそうである。先日、私どもの助成プロジェクトである、きょうとNPOセンターによる「副業規制の緩和によるセカンドキャリアの形成を目指した調査研究」の報告会に参加させていただいた。

この調査は、京都市内の中小企業における副業規制の実態把握と、福祉職に限定して副業が可能になった場合の社員側のニーズ、福祉事業所側の受け入れニーズについて、アンケートとヒアリング調査を行ったものである。結果、8割の企業が明確な理由なく慣例的に副業を禁止していたものの、社員側、福祉事業所側双方にニーズがあり、企業側も、社員のセカンドキャリア形成や働きやすい職場環境づくりのために、福祉分野での副業解禁に前向きであることが明らかになった。

実施に際しては、「長時間労働の懸念」「雇用保険や社会保険の混乱」「本業に注ぐ気力・体力の減少」など解決すべき問題が山積していると思われるが、単にお金を得るための「副業」や「複業」ではなく、社会課題の解決につながる「複業」であれば、ぜひ実現してもらいたう。[M.O.]

●実は、「お茶っこ通信」には富山支部がありません。以前、小学校の統廃合問題について書いた記事を読んだかつての助成対象者の方がお手紙をくださり、ありがたいことに、その後も、関連する新聞記事の切り抜きを送ってくださいています。

先日、記事を手に取り「あっ！」と声が出ました。連絡の途絶えていた大学時代の同級生が写真入りで掲載された記事が同封されていたのです！なんと、富山でカフェを開いているとのこと。私も似たようなカフェを宮城で開いたころでしたので、余計に驚きました。インターネットで店名を検索し、久しぶりに連絡が取れました。コラムを書き始めたことで始まった助成対象者の方との文通が、さらに旧友との縁を再び紡いでくれるという奇跡的な出来事でした。いつか、富山支部局長と共に、そのカフェを訪れてみたいと夢見ています。[M.K.]

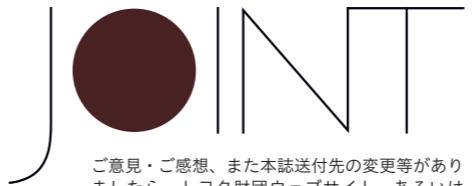
●あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

前号からトヨタ財団における大先輩、山岡義典さんにお話を伺うシリーズを掲載し始めたところ、山岡さんがPOを務めておられた時代に助成を受けられた方々から、大変懐かしいというおはがきをたくさんいただきました。今号ではこの企画を発売してくださった岡山NPOセンターの石原達也さんと対談していただきましたが、いかがでしたでしょうか。今号へのご感想、ご意見なども同封のはがきにてお寄せください。

また、カガモクプレゼント企画には50通を超えるご応募をいただきました。ありがとうございます。当選者の皆様へは一足早いクリスマスプレゼントになるタイミングで発送させていただきました。心のこもったこけしたち、ぜひ可愛がってあげてください。

巻頭特集のインタビュは同行させていただく予定でしたが、体調不良のため何うことができませんでした。大津さん、馬場さんには多大なご迷惑をおかけいたしましたこと、この場をお借りして改めてお詫び申し上げます。ご協力いただきありがとうございます。[N.]

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS



ご意見・ご感想、また本誌送付先の変更等がありましたら、トヨタ財団ウェブサイト、あるいは同封のハガキにてご連絡いただくと幸いです。

JOINT [ジョイント] No.26

発行日 2018年1月25日
発行人 浅野有
編集 トヨタ財団 広報グループ

発行所 公益財団法人 トヨタ財団
〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階
[TEL] 03-3344-1701
[FAX] 03-3342-6911
[URL] <http://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉
デザイン エディション・ヌース
印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。



On The Journey
—旅の途上で—

干し柿が出来上がる前に雪が降りました！今年も2000個ほどの柿を収穫し、500個を干し柿にしました。2017年12月宮城県鳴子温泉にて(本誌P.27参照) ●写真撮影：加賀道



公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION



UD
FONT

